

した。

和歌山発王寺止り五〇六列車の倉庫買出しの検査、俗にブツクマケ。検査物品収容所には未だ十数名の検査物品所持者が、ワミ値で買った物品を公道で買上けられるべく、列を組んで順番を待っている。取締警官三十数名、鉄道公安官や職員、倉庫公団員等合算すれば六十名に近い者が虎の威を借る狐にも似て、威張り反っている。豆、馬鈴薯、小麦粉、麦、米などが積み重なり、小麦粉に至っては泥靴で踏み荒されて土や泥が混り、倉庫は使しえない状態である。豆は踏みつぶされて皿敷している。――今日の取締りは何処でやっているのかし、本日は警察ですし、警察？鉄道公安とか倉庫公団とか、そちらの都合で皮杖検査をやられては、旅客は大迷惑だ。収容物品の明示とか、その行先は公告しないのかし、警察へいつて頼んで下さい……

数分後に到着した下り三〇二列車で再び車中へ。買出嵐の人達を囲んで産婆的にまいてみる。――それ何

買つてきたの？」「小麦五斤程買いましたナ、うちこそ息子は戦死して嫁と孫三人の四人家族で、嫁が工場で働くだけでは孫に陶飯がたべさせられないので、私がこんなことして暮しの足しにしています。また「大阪で小麦をば一廿一三〇円、田舎で八〇円すし、汽車賃使つても休みには買出しに出るとやつていけない。カー、米の代りに砂糖とか馬鈴薯を配給されて、喰い盛りの子供は満足しません」「こんな僅かなことを取締るけど、他に大きな困がおまんかな」「巡査かて何してるや判れへんで」の声・声・声……

このあと、平氏新岡は、8月28日と30日2日入里旗を押し立てて、東北にひとり行く。大宰素願の車掌との闘争記。9月5日10月4日から4回にわたつての連載入権方は常に不満足。新岡宣伝に拾うVの若佐老人が新橋駅で連行され、十数人にかまわれ、手錠のおとしなどをうけてそれをけつけた記事、の。一〇四号昭和21年1月24日入拘留生活十日間、佐野、山一、新肉宣伝でのブタ殿入り記。などと、ほとんどが官

憲の妨害、それとの闘争にふれていて、列車内の新聞販売が次第に容易でなくなつていく推移をあらわしている。このような紙代納入の悪化をならし、平民新聞発行経営を困難化する要因は、他にもいくつかの向題として、そのころ生じかけていた。即ち、用紙雜の徐々ながらの解消は、ようやく出版物がさまざまなかたで刊行されることになり、列車内の旅客も、かつてのたい好意心だけで飛びつくということがなくなつてきたこと。カニはますますインフレの最達、(平新紙代は、一部30%↓50%)(27号29年5月)↓一田(33号29年7月)↓一田五〇%)(45号29年10月)↓二田五〇%)(80号29年7月)編集室に「印刷費の漸騰に加之紙価の二倍値上げ、郵税の四倍値上げで定価も改定せざるを得なくなつた」とある)↓五田(109号24年2月)紙代を完全にうけとつても、新しい製法に足りないような急激な値上げで、どうしようもなかつた)新潟財政の基盤であつた、(北九州新聞会)の経営もまた不振化してきた(事業部尙の資本不足その他によ

る赤字。メンバーが地味をはなれ遠隔地で販売活動をするための経費増。やむをえな徒食の派生。生活費の昂騰などは、新潟販売での専従生活を又々にハリなものと変えていつた)カニは、平民新聞の読み手(読者、連盟員も含む)、売り手(新聞会、支局)作り手(編集局)そしてそれを機関紙としているアナ連内の、主として在京連盟員の人内関係がからんだ、新聞至密への対応の仕方(さまざま)向題である。(これは表面化しないで増末的な現象でのトラブルの中にあらわれ、総力を運動の集結である新聞に集中させることを妨げた。とくに東京での人内関係の一部での不和、編集陣への攻撃は二年近くの固定化により表面化し、編集陣の自己生活を犠牲にした献身から、手をひくようなイヤ気をも起させるものであつた)

このような状況下で、新聞経営は次第に悪化し、それそのものとして、殆ど(突進)一二九号(昭24年8月29日)で、発行を休止したまま、同年十月岡山でひらかれた全口委員会で、ついに廃刊のやむないことが決

定されたのであった。一の新肉休濠刊にとまなう新
肉会解散の処理として、無政府農園その他の試みや
翌年の連盟分裂などについて、まだふれねばならぬこ
とが閉連としてあるが、紙面の都合で割愛する。

たゞ小松さんと閉連して、連盟の分裂につき、か
いておきたいことがある。自由連合カーrier号(一九六
五年八月一日)へ戦後日本のアナキズム運動(行)に、
西日本地域が行った決闘と閉西の者の態度、方針が分
裂の主因ととられかねない表現がある。だが小松さ
んは何よりも連盟の分裂をがなしめ、その再合同をば
杖会ある毎にねがっていた。そして分裂後も、連盟・
アナキストクラブの区別なく、つきあいを続けた。
(またそれはほぼ閉西の者全員がそうであった)分裂
は東京に起り、そのとほつちりとして閉西をまきこん
だのであって一日圓、東京のように顔をつきあわせず
たまの出会いには親しきなつかしさがかもったものだけ
であつたからとも、或は思想ぬきの仲よし主義と貶さ
れてもけんかわけは合点のいかめものだった。

小松さんは何ぞか仲介をしようとした。それは小松
さんの人柄からくるあなたか権力というよりも
へん々へのやさしさ、おもいやりの深さからだった。
そして幸ある毎に分裂を残念がついてた。

それはまた、後年のあの中鉄鉄道集人里パン出
版記念集会への大きな犠牲的努力、それに対してAR
Fグループの一部が粉砕を叫び内ゲバをかけてきたと
きの、怒り、悲しみ、そして沈黙の姿のなかにもあら
われている。

最後に、小松さんが死んでからようやく気付いたこ
となのだが、あまりヤンをもつて文章をかくなどのこ
とを好まれなかつたような小松さんの、生前にかきの
こしたものは、ほとんど追悼文、あるいはそのおもい
がこめられたものばかりなのである。例えは、望月辰太
郎さん(昭和41年2月7日没・大正末期から昭和初年
にかけて埼玉縣大宮で無差別社を作り、浦和の小作人社
(木下茂)と共に同地で廢娼運動・水平社運動、小作人
季節自由労働者同盟等で活動した)の追憶集が出たが

それほど深く長い縁故があつたとは思われまい。小松さんが、そのガ一面に文章をよせている。そして推定からしてそれはおそらく病気で倒れ、やがて替くこともできなくなる直前のものだろう。

いまこのように、小松さんの追悼文集をつくつていて、友人たちを、そしてことさらに死者をおもひ情の人一倍ふかかつた故人をおもひうかづ、ひとしお感懐ふかいものが胸裡をよぎるのである。

旧今宮村の子供時代から 逸見吉三

小松君とは、私が二年生彼が一年生からの友達である。

今宮村小学校の生徒は、釜ヶ崎方面から全校生徒の

あいつどのやつ 長町浦の

「田ニシ」ひらいの子じやないか

河内大和方面から子守奉公に來ている子守傭がうた

う舌くからの子供うた。この長町浦と背中合せの今宮

村広田町広田神社横に五才まで、六、七、八才まで今

宮釜ヶ崎で大きくなり今宮村小学校へ一年通った。私

は学校ではるくに勉強も出來ず、毎日先生が生徒をせ

ぬるのを見てすげうした。

業の何時向かを食っていた。

盗品はめったに出でこず、釜ヶ崎の露店に売られ、

傘は五銭か十銭位で買いとられ、下駄は二銭位である。

それが大福もちやうど人になり腹の中に消えてゆき、

犯人さかして無駄と知りながら、先生はこれを毎日く

りかえさねば被害が高まるばかりだ、たのである。

「このクスリは『熊野ご王』のクスリであり、これを昏人なのぬ。盗まん奴はどうもないが盗んだ奴は血をはいて死ぬる。」犯人の順番に近づく二、三人の奴が逃げて帰るのですべわがる始末で、この「熊のごおつ」はよく効いたが、明日になれば平気で登校してくる有様で父母をよび出して「す、罰を食っても平気で盗むことを止めない。」

学校の祝祭日には全校生六百人が祝日の「紅白まんじゅう」もらいの生徒で八百人位にふくれ上る。学校では仕方なく予算を組んでいたのだから。よちよち歩きの子、四才の一年生が僕等二年生の列に加わり、うれしそうにもらってかえろ。

コレラ、チブスの伝染病は釜ヶ崎から火の手が上る。ペストが流行した時などはタン張りの囲いが釜ヶ崎に張られ、ゆでダコの様な色の人向が病院へ運ばれてゆくのをみた。

父がこれを恐れて私を恵美才一小学校へ転校させてくれた。二年生の頃である、学力も大分おくれた。

し、もともと勉強なんててんで頭になかった。私は転校しても、父が関係している映画館で学校の仲間達を何十人もタダで入場させて遊んでいた。小松君もその中の一人である。

無料入場券を街や学校の生徒達に配るのも私の仕事であった。あまり遠い町へ配るのをいやがって水崎町町、釜ヶ崎広田町の新世界から千メートル位を毎日町を変えては配った。

この間はいつの間にか野次馬根生の強い子供として成長していた。

戎神社か広田神社のいずれかであったが、巫女さんが神社の軒下で殺されているのを発見して学校の仲間知らせたら皆んな神社へ飛んで来た。紅いハカマと白衣と長い黒髪、青さめた巫女さんの死体。この時から神社仏閣に対する敬まう気持ちには失なわれた。

学校での野次馬のリーダーはというと、私である。長町浦お市ばあさんが沢山のもらひ児を死なせ古井戸に捨て、その死体や骨が何十体も引き上げられた。こ

のお市ばあさんは警察に上げられていたが、お市の娘さんがこの幼児の葬式に何故か参列し、人々に石を投げられ血まみれになった姿は今も目の中にある。商家の主人や番頭が水商売の女や女中に生ませた子供を、三十円や五十円位のハシタ金でお市ばあさんが次々と片づけていたのだ。

私や小松君が育った旧今宮村はこんな所であり、社会に対する不信の眼や心が自然と生まれてくるのは当然である。私がいつだったか、社会運動の陣営に参加した彼に、我神社の巫女さん殺しやお市ばあさんのもらい見殺しを見たかと聞いたら見たと言った。

私や小松君が社会運動に参加したのは、子供時代住んでいた旧今宮村の邊から出発している。私は父に社会主義の理論を教えられる前にすでに、感情的にそう育っていた。

小松君のお父さんは父直造のファンであり、父にたのまれて時々、天王寺公会堂演説会の無料入場券を小松君宅やその近所の三宅と言ふ父の友人宅へ持ってい

った代金から、学校でもたまに口を聞くことがあった。彼は小学校を卒業するとすぐ山口銀行の給仕となり、夜間商業へ通っているのを知っていたが、私の方はすでに少年社会主義者として成長し、演説会の切符売りや発禁新聞の受取係に空堀町の武田伝二郎宅や笠屋町か玉屋町にあった岩出金次郎宅へ出入りし、彼とは卒業後二、三年は顔合わせなかつた。

私が「福田大将事件」の共犯として大正十三年十一月末捕えられ、京都、大阪、東京と三大都府（当時府とついていたのは東京府、大阪府、京都府だけであつた）の刑務所を廻って最後に大審院（今の最高裁）の判決が下りた大正十五年八月、入獄を前にしてバクーニン死后七十年記念集会在が本所か深川の労働者街の劇場を借りて催されたとき「大阪からの労働者代表小松龜代吉君」と司会者が言うや、小学校時代の小松君が演説を聴めたのには、私は予期しなかつただけに驚きであつた。あくる日、高田寺方面で私は紹介され演説を始めた。「私は二日後に、監獄へ行きます」と、中決、

古田らの知られざる事件の半面を語り出すや、立会いの署長が「んこいつ犯罪予告をしやがる。検束しろ。」と四・五人の警察官で杉並署へ連れて行かれた。当日の司会者は新居格氏で、犯罪予告の現行犯の意味がのみこめなかった。が、当時の警察系令にはちやんとあつた。私が二日後の大審院判決で監獄へ行くことが何で犯罪予告になるのかと、特高主任や署長にかけ合つて、二日後の入獄の意味が解つて釈放された。大審院の判決は有罪で、保釈中の者は入獄までたしか五日か一週向娑婆に別れを借しましてくれた。

入獄の前夜、本所深川の仲向の送別会で私は小松君に再び会つた。大阪へ帰つて共に運動をやるうじやないかと別れた。

大正天皇の死、現天皇が昭和天皇となり、おかげで大赦特赦とつづいて、刑期の半分近くの入獄で私は昭和二年出獄。小松君は東海黒色青年連盟の中心的活動をしていたので大阪への帰途、静岡市に立ち寄つた。マキノ修治、足田治作らと会つたが、小松君

は他市へ行っているとのこととで会えなかつた。それから何年目か大阪へ妻君をつれて帰つてきて二人の運動がはじまつた。

インテリとしてはよき男であるが実際の活動家（特に労働運動に対しては）としては単なる煽動家のそしりがあつた久保義君が大阪に居たが、私が大阪アルミ争議での入獄中、広島県での「トモ」で争議が起ころ日野弥平、山口勝清、小松君ら五、六人の援軍が広島へ走つた。

言葉に現はせないほどのストライキ弾圧に日野君が組合旗の剣先で巡査に重傷を負わせ、共犯として小松君らには有罪入獄、日野君は六年であつた。彼は出獄して組合活動を大阪でつづけていたが黒色青年連盟のアソシエイト運動にいや気がさし、労働運動から去つていった。

終戦后再建されたアナキズム運動、ことに平民新聞が発行され、小松君はその最先頭に立つて国鉄車内での強行立売りのため全国を走り回つた。私は日労会議

のストライキマンとなり、何も手伝わなかった。彼は岡山の高畑信一と共に大活動をした。

岡山の高畑信一君はいつか私に、君は小松君をあまり高く評価していないと言ったが、私はそれについて高畑君に反論をなにもしなかった。

私は小松君ほどお人よしに成れなかったからだ。彼から或る時期は運動の上で何もなかった。ケンカをしたこともあるが、どちらかからいつのまにか寄り合っていた。

取人が止めてしまっている。手伝わないか？と言え「よしきた」で、彼は税金問題では私の知人や友人をよく世話してくれた。

彼の死期が近づいていることを、沢山の仲間に先立たれてよく知っている私は、三日目に一度位訪ねて、二時間をすぎずにとつとめた。

彼は自分の病気が何であるか家の人々に言わなかった。死んだ中尾正義が泉南の仙石病院で死去した時の様子とそっくりであった。

高射砲の音を聞きつつ仲喜一・林隆人、安田理貴子と四人で一里ほど先の村の墓地に車を引いていった葬式の有様を彼に語った。彼自ら中尾の死の有様を聞いたから、しらすしらす長く話した。

小松君を来診にきた病院の先生を加えて一時間ほど私が戦時中、主人が出征しているのにお腹が大きくなってくる夫人達に片っぱしから流産手術を教えたり、私自らが行ったやり方、薬の調合等、先生と話したら彼はニコニコ笑いながら聞いていた。それから丸二日目、目が彼の死である。

中尾の時も彼を見舞って四日目で死に、久保護が福泉（泉南郡）で世を去ったのも彼を見舞って一週間あまりであった。

中尾といひ久保君も一人淋しく見守ってくれる人もなく死んでいった。野州伝三郎が釜ヶ崎の安宿で死んだ。ポケットに私の住所が残っていた。文字通り阿倍野の焼き場へ行路痴人として警察は送った。私を知っている時高の連中が「あとで逆見がなくなってくるぞ。」

死んだことだけは知らせてやれ」で、火葬寸前であ
った。これからの仲間達の死を思ふとき、小松君の死は
沢山の子や身内の者に取囲まれて、死後の書寫まで
残しての死である。

近く父直造の五十年忌がくるので、父や大阪を中心
とした仲間達の文字を通りの新編去胎覚書を書く。そ
れには小松の墓さんのことをかきたい念願である。
走りがきで失礼。

一九七二年三月二七日



18
の
11

後記にかえて

向井 彦

死の二年前の新春初頭、山松さんは「乾坤一擲」の自書を、おのが部屋に壁にかかげたという。

六十余才にしてなお われと我身をなげうつ、このひたむきな情熱の決意は、何をぼくらに伝えようとしたのだろう。そして、その年の九月、刑死した中浜鉄のへ馬、パンと入組園と自由のへ大杉栄追悼特集復刻版が上梓された。 ついで、武良三のへ強権主義の解題復刻版の協力出版を実現した。だが、そのころすでに病床につき、ついにその後の企画は実現せず、死んだ。

一九七一年四月十二日午前一時。 享年六五才余。

大正、昭和、戦後とつづく山松さんの生涯を通じてのアナキストとしての足どりは、とくに戦後、死の最後までそうであつたことによつても稀有の人間像を、私たちにのこした。同志の世話をおれほどよくし、カンパをおしみなく出し、なお活動者として、人目に立たぬ都門を中りつづけた、その人間的な美しさ、やさしさは、ながくぼくらの胸裡にあつて、消えることはないだろう。

彼がぼくらにのこしてくれたもの大きさにくらべて、あまりにもまずしい小さいものながら、ついで、この追悼文集へ叛逆的頌をささげたい。

x x x x x

当初、逸見さんが発企されたこの追悼文集の実現のため、できる限りそれを手伝おうと志した。

か、いつしかバトンタッチをうけたかたちで、たゞともかく、どんなことをしても刊行はしよう、とい

う一点だけで、それ以上のことはおのれの非力ゆえ、どうしようもなかった。

すでに故人の山川正夫さん・久保譲さん・副島辰吉さんなどの卒後のごときも、追悼文集とか遺稿集出版が話し合われた。しかし今迄に、遺族の手によるもの以外、それが実現したことがなかったと思う。

その実現を困難にしている主な理由は、①発行に要する経費・資金 ②編集者、寄稿人の有無と原稿蒐集問題。③それに従哲するゆ力と時間、である。

小松さんのものをともかく出すことによつて困難を問題の克服方法というよりも、先鞭をつけること、実現させること、がぼくのねがいだった。

文集の内容については、ぼくのかいたものを含め、色々の批判があろうと思う。せめて七一八の頁位のもの、という思ひに対して、弊病がすくなかった。いずれも相当の筆輩となられ、日頃でも文章をかくことから遠ざかつておられるという事情もあつただろう。やむをえないことである。

追悼集であると共に、運動史の資料としても読まれるもの、というのが編集の方針で、とくに小松さんのことに注目せず、その活動していた当時の状況なども、という執筆依頼を出したが、ほとんどそのようなものは送つてこれなかつた。したがつて、編集方針は、資料集をも加味しながら、内容はそうでない、というチゲハグがある。よみづらい矣、おゆるしを頂かねばならない。

最後にカンパを送つて下さつた方々、ガリ切り、印刷、製本、仕上げその他を手伝つて、この刊行を可能にしてくれた、若い人たち、及び何かと配慮頂いた、逸見、河本両先輩に、心から感謝する。四月四日



小松龜代吉追悼“叛逆頌”

一九七二年四月五日印刷製本

一九七二年四月十二日

小松龜代吉一周忌発行

大阪市東住吉区平野政所町五の二四

小松弘明方

限定 300部

叛逆頌刊行世話人会

代表 逸見吉三

非売品

